

ヒミコ女王国の興亡～記紀・倭人伝の天変

作花一志

連年の皆既日食の裏には

幻の女王ヒミコ、彼女は1000年以上も日本人を惹きつけ、また悩ましてきました。その出典はもちろん『魏志倭人伝』、その本格的な研究は江戸時代からですが、すでに『日本書紀』の成立前から行われてきました。ヒミコとは誰か？彼女がいた邪馬台国はどこにあったか？卑弥呼とは中国での当て字でこの字にこだわることはありません。Americaにアメリカとか亜米利加とかいう字を当てるようなものですから。わが国的には日巫女あるいは日御子でしょうが、ここではヒミコと書くことにします。



247年3月24日とその翌年9月5日の日食は日本古代史に重要なヒントを与えてくれ、わが国古代史上最重要の日食といえるでしょ

う。前者は図1（左）のようにアフリカから朝鮮半島まで、中国（魏）の洛陽や長安では夕方、皆既が見られましたが、わが国ではすでに太陽が沈んだ後のことです。しかし

部分食は日没前に始まり、その欠け具合は西にいくほど大きいのです。近畿では日没時に半分強ですが、北九州では7割くらい欠けます。地平線近くで欠け始め、細くなりながら没する太陽、明日はもう昇って来ないのではないかという不安を駆り立てる壮絶な光景です。一方、後者の皆既ゾーンは図2（右）のように能登半島から北関東さらに太平洋上に長く延びています。中国ではまだ夜明け前、朝鮮半島では低空の東天 この皆既日食が見えた陸地は地球上で本州の一部だけですから黒い太陽の記録は世界中どこにもありません。近畿でも九州でも部分食とはいえ太陽は9割欠けます。太陽が欠けていく過程は見られず現れた時にはすでにやせ細った状態、そしてすぐに復円が始まり、7時にはすべて終了します。この日食の後半の過程を見た当時の人々はきっとホッとしたことでしょう。もしあなたがこれら2つの日食を眺めたとしたらどのように感じますか？

これらの日食は現在 PC で再現できますが、記録伝承には残っていないのでしょうか？日食そのものの記載はありませんが、伝承なら『古事記』、『日本書紀』の中に、もちろんアマテラスの天の岩屋戸事件です。と言っても若い読者の方にはなじみが薄いかも知れませんので簡単に紹介します。



アマテラスは父イザナギから命じられ高天原を統治していた。ところが弟スサノオは乱暴者で、田の畔を壊したり、死んだ馬の皮を姉の機織り部屋に放り込んだり暴れ回っていた。ほとんど手を焼いた彼女は天の岩屋戸に籠もってしまった。日の女神が隠れたのだからこの世は真っ暗になった。困り果てた神々は協議し、安の河原に集まってとんでもないどんちゃか騒ぎを開いて彼女を引き出した。この世に再び光が戻り、スサノオは高天原から追放された。

この意味するところはまさに日食です。女神が顔を出した瞬間はダイヤモンドリングを彷彿させますね。天の岩屋戸事件は日食をもとにした伝承に違いないということは、江戸時代いやもっと以前から知られていました。

また3世紀前半のわが国のことを記した『魏志倭人伝』によると

当時の倭国は多数の
小国から成り立っていて
その盟主は邪馬台国、
その女王は卑弥呼だった。
卑弥呼は鬼道をよくし
高殿で暮らしていて
弟が彼女の言葉を
人々に伝えていた。狗



図4 ヒミコ [3]

奴国と争いの中、正始八年（247年）彼女の要請により魏使が邪馬台国にやって来たが、間もなく卑弥呼は没した。後継の男王が立ったが互いに争い、内乱状態となった。そこで魏使の主導で壹與（トヨ？イヨ？）という13歳の少女を女王に推し立てて争いは収まった。

これらの伝承記載をつなぎ合わせると前年 3 月の日食はヒミコの死・アマテラスの天の岩屋戸隠れを、翌年 9 月の日食はトヨの擁立による平和回復・アマテラスの再出現による世界の復活を表しているように思えます。前年 3 月の日食は邪馬台国の人々に長く凄惨壮絶な記憶をもたらしたことでしょう。邪馬台国はどこにあったか、ヒミコは誰かということについての調査研究は、300 年前の新井白石に始まり、さまざまな説が立てられ、大和・北九州のみならず国内各地から、はるかジャワまでの無数の候補地があるそうです。所詮『魏志倭人伝』の短い文章の解釈だけで推察するにはネタ切れで、もう新説は難しいでしょう。しかし天文計算という新たな手段を使えば「日食がよく見えた北九州」にあったとする説が有利になりそうです。これらの日食については斉藤国治氏の著書[4]に詳しく載っています。

ヒミコは 238 年から何度も魏へ使いを出しています。その時の魏の皇帝明帝は曹操の孫で呉・蜀と戦い続けていましたが、はるか遠国の女王に気前よく親魏倭王の称号、金印紫綬、銅鏡百枚などを授与します。ヒミコはそのお墨付きで周囲の国々へ権威付ける必要があったのでしょう。トヨの治世となつてからは魏の実権は皇帝（曹氏）から司馬氏へ移っていき、ついに司馬炎（諸葛孔明のライバル司馬仲達の子）が魏より禅譲を受けて晋を建てます。その翌年 266 年には早くも倭王が晋へ朝貢使者を送ったと『晋書』に記載され、これが『日本書紀』の神功紀に「倭の女王の使者が朝貢した」との記述で引用されています。その時の女王は多分トヨでしょう。彼女は 248 年の共立時に 10 代の少女ですから、この時 30 代半ばでシャーマン力は旺盛なころで、国際情勢にも敏感のようです。しかしこれを最後にその後 150 年も倭国

のことは中国の文献から途絶えます。ヒミコ・トヨ女王国は滅びたのか？東遷して大和朝廷になったのか？わかりませんが 4 世紀に女王制は消滅したようです。5 世紀になって中国（南朝）に頻繁に遣いを出して朝鮮半島に影響力のある官位へ任命を求めたり，血なまぐさい肉親同士の後継者争いをしたり，また河内・大和に巨大な前方後円墳を作った倭の五王（応神～雄略）はヒミコ・トヨたち女王とは別系統のように思えます。

アマテラスの出現

さて舞台は 6 世紀の大和に移り 592 年に初めて確かな女帝が出現しました。後年推古天皇と呼ばれる彼女は，夫（敏達天皇）も兄（用明天皇）も疱瘡の病で亡くしました。その跡目争いで多数の有力者が戦いに関わり命を落とし，群臣たちは先々代の皇后である彼女に即位を促します。こう



してついに皇位についた時にはすでに 39 歳，彼女の本名は豊御食炊屋姫（とよみけかしきやひめ）トヨ姫さんなんです。彼女を補佐するのは大臣の蘇我馬子（叔父）と摂政の聖徳太子（甥）ですが，その話は割愛。2 人とも先に亡くなり，手がけた初の国史の編纂は未完成のまま。その老いた女帝の没年に天変が起こるのです。『日本書紀』の巻第二十

二の「日有蝕尽之」という記載は628年4月10日の日食に当たります。わが国初めての日食の記載ですが、この5文字からは皆既かどうかはわかりません。現代の日食計算からも両方の主張があります。図5では皆既ゾーンは太平洋上になっていますが、地球の自転の遅れのパラメータの取り方で、皆既ゾーンは大きく西に移り日本列島上を走ることもあるのです。前者の場合は国内どこでも部分食しか見られませんが、9割くらい欠ける大日食です。ここで注目したいことは、皆既かどうかというよりも日食の5日後に推古女帝が亡くなっているということです。さあ、なんかアヤシイですね。

このとき人々の間に「かつて推古と同じように群臣に共立され、日食とともに亡くなった女王がいた」という微かな伝承が蘇ってきたのではないのでしょうか？しかし、今やそれがいつのことか、女王の名前もわからない。そこで隋唐から入ってきた史書の中からそれらしき人物を探す作業が行われました。史記～漢書～三国志～晋書～隋書・・・etc。何年もいや何十年もかかってやっと見つけたのが『魏志倭人伝』の卑弥呼という名前、そして、そこには載っていないが、魏本国の247年3月の日食記録でした(248年9月の日食は中国では見えなかったので記録はないはず)。しかし彼らはそれをそのまま転載するのではなく、非常に大きな話にデッチあげた。すなわち2人の女王ヒミコとトヨを合わせてアマテラスという皇祖女神を仕立て、そして天の岩屋戸事件を創造したのです。時はまたもや女帝の持統時代(686-702)！この壮大なフィクションを国家プロジェクトとして立案編纂したのは誰でしょうか？何人かの手を経て完成させたのは日本古代史を創り上げた藤原不比等(659-720)でしょうね、きっと。

6世紀末まで続いた王位争も、推古の共立でひとまず収まり、中国の統一王朝となった隋との正式国交も始まりました。推古天皇から称徳

天皇（在位 764－770）までの 200 年間、16 人のうち 8 人は女帝です（重祚が 2 回あるので実質 6 人）。飛鳥～奈良時代に女王制度は復活しているのです。隋唐文化が輸入され律令制が整備され、日本国が成立していく過程において。

以上をまとめると

九州にあった邪馬台国の女王で太陽神に仕える巫女であったヒミコは、亡くなる頃に起こった 2 回の日食により、死後は太陽神として崇められるようになった。その事件は細々と人々の記憶に残り、推古天皇の死を契機にアマテラス天の岩屋戸隠れ伝説が生まれた。

247 年 3 月 ヒミコが没し内乱始まる アマテラス岩屋戸に隠れる

248 年 9 月 トヨの共立、平和が蘇る アマテラス岩屋戸から出る

と考えられそうです。

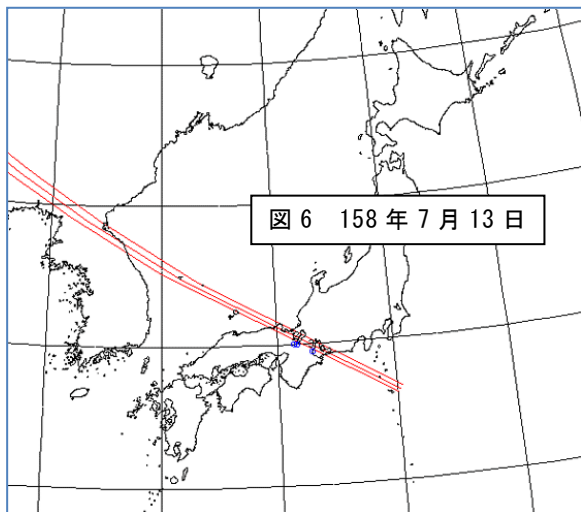
	年月日時	種別	地域
1	146 年 8 月 25 日午前	金環	若狭湾～房総
2	154 年 9 月 25 日午前	皆既	佐渡～北関東
3	158 年 7 月 13 日夕方	皆既	図 6 若狭湾～伊勢湾
4	168 年 12 月 17 日夕方	金環	図 7 九州・中四国
5	247 年 3 月 24 日日没	皆既	図 1 わが国では部分食
6	248 年 9 月 5 日早朝	皆既	図 2 能登～北関東
7	273 年 5 月 4 日夕方	皆既	能登～北関東
8	454 年 8 月 10 日昼間	皆既	九州～南四国
9	479 年 4 月 8 日夕方	金環	山陰～関東
10	522 年 6 月 10 日午前	皆既	図 9, 山陰～北陸～北関東
11	574 年 3 月 9 日午前	皆既	関東
12	628 年 4 月 10 日午前	皆既	図 5 太平洋上
13	641 年 1 月 17 日午後	金環	北九州～北陸～東北
14	653 年 11 月 26 日午前	金環	北陸～東海・関東

女王即位をもたらした天変とは 日食？超新星？

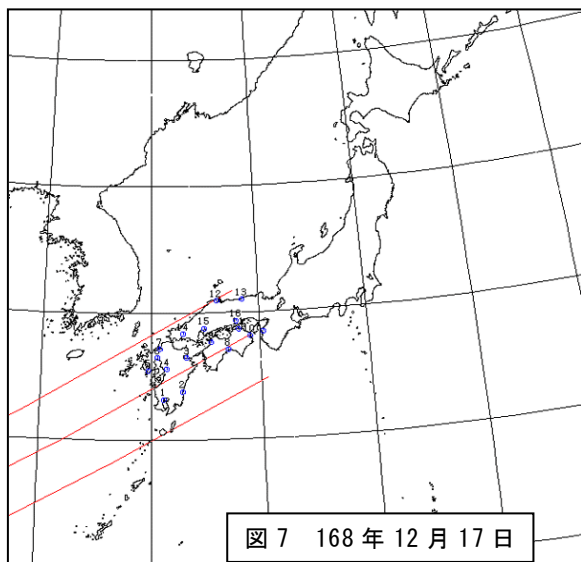
では時代を遡ってヒミコの即位はいつでしょうか？

『魏志倭人伝』や『後漢書東夷伝』が伝えるところでは「倭国はもともと男王が治めていた。桓帝・靈帝の治世の間（後漢：146 年～189 年）に大いに乱れ、互いに攻めあっていたが、ひとりの女子を共立して王とし、名付けて卑弥呼と言った。年すでに長大であるが夫婿はいなかった。」そうです。ヒミコの即位年が上記期間の最後としても、没年が 247 年か 248 年ですから、在位期間は 60 年となります。即位時に年すでに長大だったので 20 歳は越していたと考え、魏の使いを出した時にはすでに 70 歳、狗奴国と戦っていた時には 80 歳です。即位年が繰り上がれば彼女はゆうに 100 歳を越えて在位していたことにもなります。彼女は「鬼道をよくしていた」ので、当時の平均寿命の 3 倍も生きて、倭国連合を率いていたなんて、どうみても不自然ですね。『魏志倭人伝』には「倭人は長命で、百歳か、八・九十歳の人が居る」という記載があります。当時の倭人は暦を知らず、どんな歳の数え方をしていたのかわかりませんが、とてもそのまま信じられません。他にも不可解な数がよく出てきます。有名なのは朝鮮半島から邪馬台国へいたる道程で「水行十日、陸行一月」などを加えていくと。邪馬台国ははるか九州の南方海上になってしまうということが、すでに江戸時代から言われています。また邪馬台国の人口は 7 万戸と書かれています。当時は大家族で 1 戸に 10 人くらいは同居していたので、人口 70 万の大国になります。これは邪馬台国だけでなく倭国の総人口だという説もあるそうです。人間の記憶は数が一番あてにならないものです。数字は忘れやすい。これは現代の私たちもよく体験することです。11 桁の電話番号や証書の受付番号なんかとても覚えられません。また日付や時間の間違いなどは日常茶飯事です。

この超長寿の謎を解くには**初めのヒミコと後のヒミコは別人**と考えるのが最適解でしょう。2人でなく3人かもしれない、とにかく1人ではないということです。『魏志倭人伝』は伝聞録であり、魏の使者も女王には会っていません。宮殿の奥で千人の兵士召使いに守られて暮らしているヒミコの真の姿を知っているのはごく少数です。民衆や外国人には女王が代わってもわかりません。女王はみんなヒミコという名前だったのでしょ



うのでしょうか？いやむしろヒミコとは固有名詞ではなく、女王の称号ではないでしょうか。社員が社長を、家臣が主君を姓名で呼ぶことがないように、民が王を名前で呼ぶことはありません、それは古代でも現代でも同じです。倭国の民は、正確な発音は不明ですが、日の巫女（あるいは御子）という意味で女王をヒミコと呼んでいたのを、



魏の使者は卑弥呼と記した、ところがいつの間にか女王の名前と思われるようになってしまった・・・と推察できます。

なぜ鬼道をよくする独身女性が女王に共立されたのか？そのわけは、その時起こった天変のためではないでしょうか。ある日突然起こった天変に人々は神の怒りに触れたと思い、戦いをやめて、日の神に仕える巫女を推し立てました。そのような大天変とは何でしょう？地震や津波のような長期間被害が出るものより、短期的ではあるが大ショックを与える天文現象の方が適しているでしょう。それには 2 つの可能性が考えられます。

まず日食、彼女の即位年を日食の起こった時期から推定してみます。1 世紀～7 世紀までの西日本で実際に見えた大日食を表 1 にまとめました。このうち中国史書で言う桓帝・靈帝の治世の間に西日本で見られた皆既食は 3) だけです。図 6 の赤帯地域では日の入り前に皆既が起こりやがて復円しながら沈んでいきます。北九州でも日没直前に細い太陽が見られます。4) では九州・中四国では金環が沈んでいくという光景が見られます。この日食は金環時間が長いことで有名で九州各地では 7～8 分、東南アジアでは 10 分を越えたそうです。近畿でも部分食は見られたはずです。これらの日食に比べ 1) と 2) は西日本見る限りでは重要度はやや下がります。古代人にとって戦いをやめるほど恐怖に襲われたのは、やはり沈みゆく皆既日食 3) が最有力でしょう。5)、6) はヒミコからトヨへの日食であり、7) から 11) までの日食は記録も伝承もないようです。天気が悪くて見えなかったのかもしれませんが、それよりも特別な事件と関連したものだけが記憶に残ったと解釈すべきでしょう。日食が起こったため戦いをやめたという伝承は中東にもあります（タレスの日食 p ** 参照）。

ある日突然起こる天文現象で、他の可能性として考えられるものは超新星爆発です。詳しくは第 3 章で説明しますが、突如として新たな星が現れる現象です。世界最古の超新星出現記録が『後漢書天文志』に 185 年 12 月 7 日と記載されています。それは南十字星の近く（東南）

で起こりました。この天域は現在、本州や黄河流域では南の地平線下で見えませんが、地球の首振り（歳差）自転運動のため、かつては見えていました。2 世紀には近畿でも北九州でも南の地平線ギリギリに見えたはずです。この超新星は 12 月 7 日には太陽が昇った後、午前 8 時ころ南の地平線あたりにほんの短時間現れただけでした。しかし、翌年春になれば夜半に春霞と間違える春の天の川の中で半月くらいの明るさで輝いていたことでしょう。もはや誰も目にも天変は明らかです。図 8 は 3 月 1 日深夜 2 時の南空で超新星の西（右）には南十字星が、東（左）



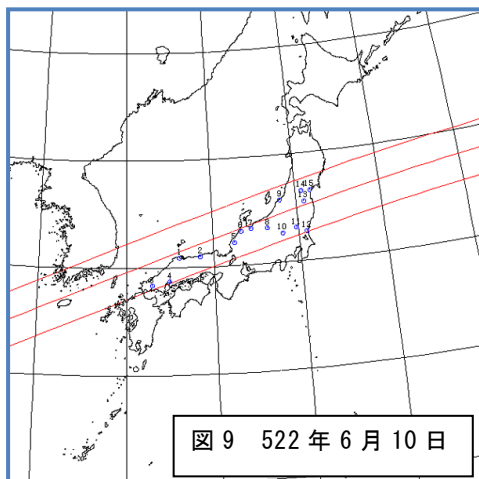
には下弦の月がその上には火星とさそり座が見えます。日食において皆既や金環の継続時間はわずか数分で、1 時間後には太陽は完全復円します。しかもその時に悪天候ならほとんど気づきません。それに対し超新星は数ヶ月間、中には 2 年間も見えていたものもあります。ある冬の朝、太陽光の中でいち早くそれを見つけたヒミコは停戦を呼びかけ、諸国の軍はその星の出現を彼女の呪術のためと恐れて、女王に共立したと考えてよさそうです。

以上より多少の無理は承知の上での推論です。

倭国は 2 世紀後半に大乱が起こったが、ある天変により日の神に仕える巫女が女王に共立されて終息した。その天変の候補としては 158 年の皆既日食の可能性もあるが、185 年の超新星出現（1 年も輝き続け、最輝時には昼間でも見え、歴史上最大規模）もほうがよりふさわしい。

彼女はヒミコと呼ばれるが、後継女王も同じ名で呼ばれていた。ヒミコとは固有名詞ではなく女王の称号で神の声を聞くのが役目だった。238年に魏に使者を遣わし「親魏倭王の称号・金印紫綬・銅鏡百枚」などを授った「邪馬台国の卑弥呼」はその第2代か第3代の女王であり、トヨはその次のヒミコだった。女王制は約100年間続いたが、トヨの後、途絶え、その後わが国は男系大和朝廷によって統一される。ところが推古の即位で復活し皇祖神アマテラス神話が出来上がった。

最後にアマテラス日食はいつでしょうか？伝承の元になった日食の候補は多数あり、その特定のための議論は100年以上も続いていますが決め手はないようです。どれかひとつの日食に決めつけることが無理なのではないでしょうか。記紀が成立するまで何回か起こった日食の中で、最大のものは10)継体天皇の時代522年6月10日の日食です。皆既帯が列



島を縦断し全国ほとんどの地域で暗黒の太陽が見られたはず、しかも皆既時間は日食帯中心線上では6分もありました。こんなスバラシイ大日食でしたが、その記録は見つかっていません。梅雨のさなかで全国的に悪天気だったのか？それともすっかり忘れられてしまうような日食だったのか？この頃すでに文字は使われていて、刀剣の由来など断片的な記載はあります。

では158年、247年、248年それとも628年の日食でしょうか？いや、どれかに特定するのではなく「それらの日食の記憶とその時の女王、すなわち初代ヒミコから推古までの記憶がすべて重なって伝えら

れ，7世紀末にアマテラス伝説に纏められた。」と考えた方が自然ではないでしょうか。

参考文献

[1] <http://www.hucc.hokudai.ac.jp/~x10553/>

[4] 斉藤国治『宇宙からのメッセージ』雄山閣 1995

[2]

http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%95%E3%82%A1%E3%82%A4%E3%83%AB:Amaterasu_appearing_from_the_cave..jpg

[3] 中西久崇

[5] 義江明子『つくられた卑弥呼』ちくま新書 2005